

小学校からの帰り道だった。当時の私は四年生。その日は、初めて競書大会に自分の作品を出す日だった。習字教室に通い始めて半年しかたっておらず、まだまだ初心者だった私は、少し緊張しながらもとてもわくわくしていた。早く帰って教室に行かなきゃ。そう思って私は、一人で家への帰り道を走っていた。すると、前方に一人のおじいさんが見えた。普通なら「こんにちは。」と挨拶して、横を走り過ぎるはずだった。でも私の足は止まった。おじいさんの様子がおかしかったからだ。足下はおぼつかず、駐めてある車にぶつかったりよろけたりと、とにかく普通じゃなかった。私はそのおじいさんの姿を見て、酔っぱらっているのかと思った。昼から酒を飲むおじいさんなど、そう珍しくない。私はもともと、酔っぱらっていることが怖かった。言動が支離滅裂だし、酒に酔って事件を起こす人もニュースで何度も見たことがあったからだ。だから、あまり関わらないようにしようと、足音を立てずに走り去ろうとした。すると、バタッという音が聞こえた。おじいさんが私の目の前で倒れてしまったのだ。「大丈夫ですか。」と叫んで慌てておじいさんに駆け寄ると、真っ赤なものが見えた。息ができなくなった。おじいさんは転倒して、頭を切っていたようだ。助けなきゃ。私が助けなきゃ。周りに人は見当たらなかったため、私は走って近くの駄菓子屋さんに駆けこんだ。店の人にすぐに救急車を呼んでもらった。私は怖くて、救急車が到着するまでその場に居ることができず、救急車が来る前に泣きながら家に走ってしまった。おじいさんが亡くなる可能性が怖くて耐えられなかったからだ。その後も気になってはいたが、二年間友達にも話せず、店の人にもおじいさんのことを聞けなかった。でも、卒業式が終わった帰り道、私は思い切って店の人におじいさんのことを尋ねた。すると、おじいさんが今も元気だということを教えてくれた。あの時は酔っていたのではなく、体調が悪くてまともに歩けなかったらしい。

日本では、救急車を呼んでもお金はかからない。税金が使われるからだ。これは特別なことだ。例えば、アメリカ合衆国で救急車を一台呼ぶと、日本円で約三万三千～約五万五千円かかる。多少のけがぐらいだったら、呼ぶのを少し躊躇しそうだと思った。でも日本ではそんな躊躇は必要ない。みんなでみんなの命を守る社会。これがあったことで助けられた人、誰かを助けることを手伝った人がたくさんいるはずだ。実際、怖がりの私にだってできることがあったし、結果的に一人の命が助かった。命をつなぐこと、みんなで誰かの人生を救うこと、助け合うこと。これらのことを納税という形で、国民一人一人が実現できる社会は、誇りに思えることだし、これからもずっと続けるために少子高齢化などの問題を抱える中、私たちが考えていきたい。